

視察報告 名寄市における冬季スポーツの普及と環境づくりについて：フィンランド共和国の視察を通じて

著者	関 朋昭, 荻野 大助
雑誌名	地域と住民：コミュニティケア教育研究センター年報
号	3
ページ	123-129
発行年	2019-05-31
出版者	名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター
ISSN	0288-4917
書誌レコードID	AN0001106X
論文ID (NAID)	40021941031
URL	http://id.nii.ac.jp/1088/00001809/



視察報告

名寄市における冬季スポーツの普及と環境づくりについて
 —フィンランド共和国の視察を通じて—

関 朋昭* 荻野大助

名寄市立大学保健福祉学部教養教育部

キーワード：冬季スポーツ 普及 環境 ヴォカティ・オリンピック・トレーニングセンター

1. はじめに

名寄市は、降雪の天然資源や冬季スポーツ施設等の地域資源を活用しながら、地域一体となったスポーツの普及（地域産業、健康福祉、ツーリズム）および選手育成などの環境づくりの拠点となるスポーツコミッションの設立を目指している。スポーツコミッションとは、大まかに言えば、スポーツをはじめ、健康福祉、レクリエーション、体育、余暇等々の機能や効果を活かした地域づくりのことである。

冬季スポーツの国民的な普及、スポーツ医科学を活用した選手育成の環境づくりにおいて先駆的との評価が高いフィンランド共和国のヴォカティ・オリンピック・トレーニングセンター（以下、VOTC）がある。VOTCを中心とするフィンランド共和国の冬季スポーツを学ぶことは、同じ人口規模、気候条件の名寄市においては非常に有益である。それは名寄市の冬季スポーツが、幼少から老年期までスポーツや運動の選択肢として親しまれ、名寄市ならではの健康文化の醸成を今後に期待することでもある。

そこで本稿では、VOTC（フィンランド共和国）を鑑みながら、今後の名寄市の冬季スポーツの普及と環境づくりの可能性を探ることが目的となる。

2. 視察の概要

本稿の視察スケジュールは表1である（2018年11月12～15日）。VOTC、スノーポリス、ソトカモ高校、ソトカモ市長、カヤーニ応用科学大学、ユバスキュラ大学を視察し、冬季スポーツの普及と環境づくりを理解することに努めた。これらの関係性をまずは概略すると、フィンランド共和国ではスポーツや健康は重要課題（most important）であり、教育機関と研究機関、行政が協働し課題解決に取り組んでいる。

以下、次章（次節）に各機関の視察ならびに関係者からのレクチャーならびインタビュー、そして筆者らの視点より報告を列記していく。

表1 視察スケジュール

月	日	曜日	施設（スピーカー）
11	12	月	VOST、スノーポリス（ユニ・ペルコネン氏 所長）
11	13	火	ソトカモ高校（マオリ校長）、ソトカモ市長（ミカ氏）
11	14	水	カヤーニ応用科学大学（カリ氏：学部長、エイジャ氏：教務部長、メイラ氏：国際交流）
11	15	木	ユバスキュラ大学（ヘイキ氏 大学事務局）

*責任著者 E-mail:seki@nayoro.ac.jp

3. 視察報告

1) VOTC (ヴォカティ・オリンピック・トレーニングセンター)

VOTC は 1948 年に国民に向けて冬期間にアクティブな生活を提供するため、そして冬季オリンピックのためのトレーニングセンターとして設立された。VOTC はクロスカントリースキー、スキージャンプ、コンバインド、シューティング、スノーボード等に特化した施設を有し、フィンランド共和国のオリンピック委員会の傘下に属する。VOTC は一年中冬季スポーツを専門に研究していることが大きな特徴として挙げられる。主要な研究施設、運動施設としては、クロスカントリー用のスキートンネル、スキーのジャンプ台、スノーボード用の屋内ハーフパイプなどがある。このような優れた施設と専任のプロフェッショナルなスタッフを有する VOTC は、国内外のトップアスリートのためのトレーニング環境となっている。

VOTC は近隣の小学校、中学校、高等学校と連携しつつ、またスポーツテクノロジーとの融合を目指しており、例えば 2018 年オリンピック冬季競技大会（平壤）にて地元のイーボ・ニスカネン選手（ソトカモ出身）がクロスカントリースキー男子 50km で金メダルを獲ったことなどが代表例である。

VOTC の教育プログラムには「1. コーチング」「2. スポーツマッサージ」「3. インストラクター」がある。以下は視察者と所長とのやり取りから VOTC の概観をみていく。

Q 各プログラムのライセンス発行元は？

A ヴォカティスポーツが政府公認をもらって発行している。ウィンタースポーツと教育プログラムに力を入れている。

中学卒は 4 年カリキュラム、高校卒は 3 年カリキュラムである。選抜試験が課せられる場合がある。

中学 正しいトレーニングを施す、ヴォカティに慣れ親しむことを重要視する

トレーニングキャンプを行っており一週間（勉強 3 時間を含む）滞在する

トレーニングは 3 年間で通算 15 週間ぐらいである

高校 4 年のプログラム ソトカモ高校のスポーツ専攻で学ぶ（1 学年 230 人）

スポーツ専攻には、スキー以外にも野球のアスリートがいる（35 人のコーチが生徒を指導）

Q ライセンス所持者はその資格をもとに生業（プロフェッショナル）としているのか？

A コーチの給料は 3 つの団体（オリンピック協会、企業、ヴォカティ）から捻出している。給与は公務員と同等の待遇である。

Q VOTC の顧客は？ 宿泊施設のキャパシティは？

A VOTC は多様な顧客（ファミリーから、プロ選手まで）を抱えている。

カヤニ応用科学大学、ユバスキュラ大学の学生も重要な顧客である。ユバスキュラ大学は競技力を高めるための調査研究をするパートナーでもあるが、顧客でもある。

VOTC には 600 の寝床がある。またスカンジナビア最大のリゾートホテル、カティンクルタは 3000 の寝床がある。

周辺のコンドミニアムはオーナー制度で VOTC が管理し、オーナーへ収益を分配している。

宿泊施設の年間の部屋稼働率は平均で 60% 程度である。閑散期にはイベントを設定し稼働率を上げる工夫を行っている。

身障者に対する配慮の具体的な工夫例としては、エレベータやスロープ等のバリアフリー化をはじめ、特別食等のリクエストには柔軟に対応できる体制となっている。

Q VOTC の収益構造は？

- A ヴォカティファンデーション 教育部門 フィンランドのスキー連盟の会長を兼務
カヤーニ市だけでなくカイヌーという地域が入っている
スポーツ文化省がサポート 年間予算 300 万ユーロ (4 億円)
スポーツインスティテュート 約 12 億円の予算
90 人のスタッフを雇用している。
ヴォカティスポーツリゾート 大会開催やビジネス部門 (主に宿泊費) 約 8 億円
収益は純利益であり基金として施設改修などへ運用している

Q VOTC を主導したのは行政か？ 国か？

- A フィンランド共和国には VOTC 以外にも 11 の同様の施設環境がある。
最初は国が設計した。現在は教育とビジネスの両立を図り自走できている。
11 の施設は、オリンピック協会が役割分担を決め方向性を示している。
2018 ソチ五輪では 5 個のメダルを獲得したが、そのうち 4 つがヴォカティ出身者である。

Q 徴兵制度と VOTC の関係は？

- A フィンランド共和国では徴兵制度があり 1 年間軍隊に所属する必要がある (最低 6 か月)
エリートアスリートは、軍隊学校ではスポーツトレーニング (55%)、軍のトレーニング (45%) である。

Q スノーポリス、産学官連携について？

- A スノーポリス自体は建物のブランド名に過ぎない。いろいろな民間、大学がオフィスとして居している。
各組織の出会いの場としての役割を担い、多様な出会いの場となっている。
スノーポリスの研究成果 (写真 1)、研究器材 (写真 2) の一例である。スキートンネルに (写真 4) と隣接するレストラン (写真 3) は、ソトカモ高校の選手たちが無償 (低価) で利用できる。

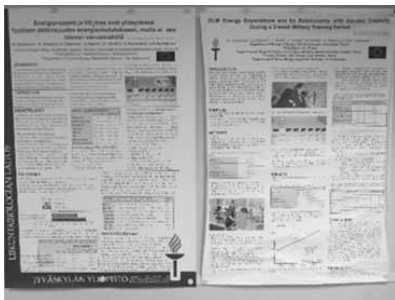


写真 1 研究ポスター



写真 2 クロカンの動作解析マシン



写真 3 高校生向けのレストラン

Q 大会運営における商業者の役割について

- A 130 人くらいの登録があって、用具などの出入り業者も含めて有償ボランティアとして参加してもらっている。
3 月、7 月が忙しい、10 月から 12 月にほとんどこないから 10-10-10 のスキートンネルなどのイベントが重要になる。



写真4 スキートネル施設



写真5 VOTCのコンドミニアム



写真6 室内スノーボード施設

Q 冬季期間における移動の交通機関について

A 冬期間の無料バス (今シーズンの場合: 12/15~4/21 の間運行 12/24, 25 を除く) は、1日4便運行されている。ソトカモ市内とヴォカティ地区の各ホテルや施設等からアクセスが可能となっている。主要な停車場以外は細かな時刻表は無く、乗降は運転手に直接伝えるなどの柔軟性を持たせた運用となっている。

2) ソトカモ高校とソトカモ市

フィンランド国内の将来有望な若いアスリートたちが集まり、スポーツ (冬季を含む) に特化したプログラム (授業・コーチ) を持つソトカモ高校がある。生徒はフィンランド国内各地から集まり、現在 332 人 (女: 181 人、男: 151 人) が在籍している。このうちカイナー州出身者は 192 人 (57.8%) となっており、寮も完備している。40 人の教師 (20 人: 一般教師、20 人: コーチ) は IT (Abitti: 試験システム、Wilma: 管理システム、Google Classroom、Moodle など) システムを活用して業務の効率化を図っている。生徒は、最低 75 コース (1 コース: 38×45 分) を履修することとなっていて、スポーツトレーニングは 12~18 コース単位認定が可能となっている。選択しているスポーツ種目や大会出場など個人差があるため、高校在籍期間 (3 年から 4 年間) は異なるが、国の最終試験に受かることが必須となっている。高校生の主な進学先は、大学、応用科学大、海外への進学であり、地元ソトカモやヴォカティに戻ってくることも多い。卒業生の中にオリンピックメダリストを輩出しており、学生食堂の壁にアスリートの写真が掲げられている。将来、校舎の立替の際は、ヴォカティ地区の近くに建設されるだろうとのことだった。

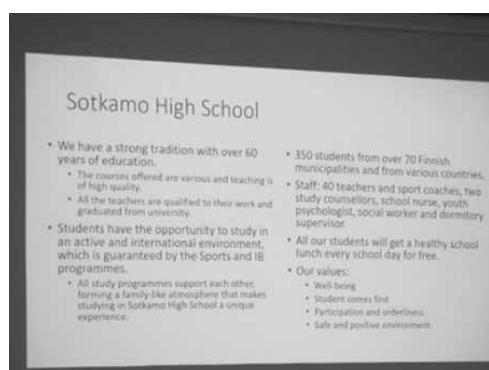


写真7 学校概要

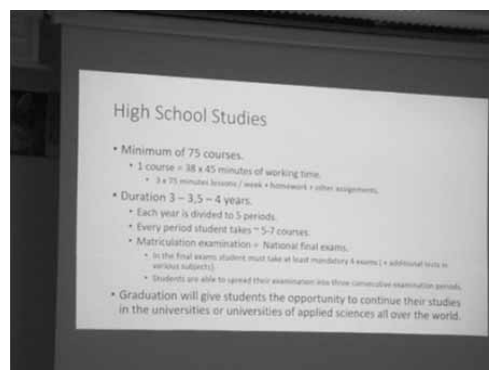


写真8 カリキュラム

ソトカモ市は5つのM (Matka : 観光、Malmit : 鉱業、Metsä : 林業、Maatalous : 農業、Marjat : ベリー) が主要産業の柱である。人口 10419 人の町ではあるが、人口変動があまりない。

この地域の労働環境の場は、鉱業と製材業のみに限定されていたが、冬季スポーツ施設整備によって、新たな観光業に関連した雇用を創出できたことは、地域経済効果を拡大することにつながった。



写真9 ソトカモ市の中期計画

3) カヤーニ応用科学大学 (以下、KAMK)

KAMK は、1992 年に開学した。フィンランド政府 (文部科学省) が大学を設立して、カヤーニ市が所有する形となっている。大学は観光、スポーツ、ビジネス、看護学科を有する。現在の学生数は約 2000 人、学生の出身内訳は、カユヌ州から 124 人/年入学し、約 8 割はフィンランド国内の他州及び国外からである。大学の教員等のスタッフは合計 235 人 (割合 : 講師約 50%、事務スタッフ約 50%) である。

フィンランドの教育全般については、プレスクール (6 歳)、基礎教育 (7 歳から 15 歳)、高等学校と職業専門学校 (16 歳から 18 歳) に分かれる。大学 (19 歳から) は、学士・修士を 3 年から 6 年で修了、応用科学大学 (19 歳から) は 3 年半から 4 年で修了 (最低 210 単位必要) し、2、3 年の職務経験後、修士へ進学するコースもある。大学博士課程は少なくとも 3 年は要する (写真 10)。

成人向けプログラムは、自由単位 (10~15) も認められ、学士を取得することも可能である。KAMK は、フィンランド文部科学省がサポートしている Open University of Applied Sciences (単一コースを勉強するため、または学位取得を目的として勉強を開始するための柔軟な方法) のシステムがある。2 から 5 コースを用意している。費用は 15 €/1ECTS、または 250€/1 年間となっており、このコースを 60ECTS (学士) または 15-30ECTS (修士) を修了した後、学位取得を目指すコースに引続き編入することが可能である。EU/EEA の市民権を持つ学生の学費は無料であるが、EU/EEA 以外の市民権を持つ学生の学費は、年度あたり 6000€ (約 840000 円) の授業料のほかに生活費が必要となる (フィンランドに住んでいる学生の月平均生活費は約 700~900€ (98000~12600 円))。

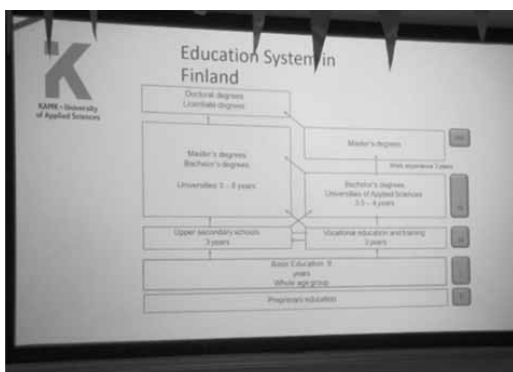


写真10 フィンランドの教育システム

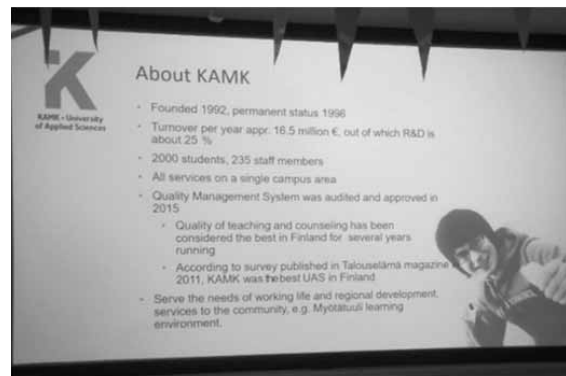


写真11 KAMK の概要

4) ユバスキュラ大学

1963年に開学。フィンランド共和国で唯一のスポーツ健康学部がある大学である。

現在、学部のスタッフは合計240人(教官等140人、事務スタッフ100人)、教員の内訳は、教授27人、講師42人、助教・助手13人、他44人である。現在の学生数は1401人、内訳は、学士・修士コース：1237人(うちスポーツ科学：858人、健康科学：379人)大学院博士コース117人、他47人である。

学部の学問体系は、「スポーツ行動科学および社会科学」「体育の生物学」「健康科学」の3つの柱からなっており、スポーツ・健康科学部関連研究においては、神経筋研究センター、老人学研究センター、健康促進のための研究センターがある。当学部関連の研究においては、ヴォカティ地区にあるスノーポリスにサテライトの研究施設を有しており、そこにはスウェーデン製の大型の計測機器を活用したバイオメカニクスの研究もされている。そのほかには、民間のSuunto(精密機器メーカー)と協力関係であること、地域の病院機関(地区データ)とも連携している。

修士修了時の進路先は、(高等、職業等)学校の体育教師、左記以外の場所で体育やフィットネスを促進する教師・インストラクター、研究者、スポーツ組織の専門家である。例えば、スポーツ社会科学の場合、スポーツ管理の専門家、市町村・組織・団体、身体と余暇のマネージャー、計画担当者、サービスプロバイダ、体育の生物学の場合、スポーツ組織のコーチング、研究者、リハビリセンターの役職、テスト部門の管理職、健康科学の場合、理学療法または健康科学の教師、産業保健・リハビリテーション・病院の理学療法士でかつその専門家・研究者、老人学や公衆衛生の専門家、行政管理役職・公衆衛生組織における保健教育の専門家やヘルスケア研究機関における研究者や教員となっており、専攻分野によっては取得できる資格などが若干異なっている。

ユバスキュラ大学では、スポーツ・健康科学部に関連するHippos2020のプロジェクト(写真15)が立ち上がり、大学内(6,500人収容の多目的アリーナ、20種以上のスポーツ設備など)の施設整備等を行っている。予算は、ユバスキュラ市(10%)と民間会社:建設会社や保険会社など(90%)が出資し、2億€以上の投資を行う計画である。年間500万人訪れることを見込んでおり、1000人の雇用を生み出す一大プロジェクトが進められているとのことだった(2018年11月現在)。



写真13 ユバスキュラ大学大学院の概要



写真14 修士課程の修了生



写真15 Hippos2020 プロジェクトのイメージ図

4. おわりに

今後の名寄市の冬季スポーツの普及と環境づくりの可能性として3点を書きとどめておく。

一つめとして、名寄市日進地区にあるなよろ温泉サンピラー（名寄振興公社）は老朽化が進んでいるため改修することが検討されているが、宿泊定員増のための大型の整備（増築・改築等）は容易ではないと考えられる。しかしながら、例えば、ピヤシリスキー場とジャンプ台の間にある駐車場の一部に、（選手合宿向け）ログハウス（定員12名程度）を建てる等、ふるさと納税のような外部資金、市内の民間企業・市民の出資を活かして、少しずつ整備していくなど検討する余地はあるかもしれない。さらにアジアからの観光客を取込むような戦略の場合、民間資本・外資等の大型な投資が必要になると考えられる。

二つめとして、名寄市内にある冬季スポーツ施設の閑散期や閑散時間帯の対策については、大会イベント企画や施設使用料などを安価な設定にするなどの工夫が必要である。フィンランド国内に共通することではあるが、スキー休暇等が設定されているのは大きい。休暇時にあらゆる年代の人が、ゆったりしたり、楽しんだり、全てではないかもしれないが、様々なニーズに応えられるような工夫があるところは参考になるのではないかと思う。やはり一つの設備や物でも、使用用途が一つに限られるのではなく、合理的で効率化されている点が特に印象に残っている。

三つめとして、今回、ユバスキュラ大学とカヤーニ応用科学大学を訪問したが、名寄市立大学の理念を照らし合わせると、本学はカヤーニ応用科学大学に近い印象を持った。ユバスキュラ大学のスポーツ・健康科学部は、スポーツのみに特化しているのではなく、特に健康科学を専攻コースは、老年学や公衆衛生などを学ぶことにより、行政、研究機関、教育機関へ就職するという点は日本とそれほど変わらない印象だが、日本では健康科学系については医学部等で学ぶことが多いため、スポーツと結びついているところがユニークである。研究の観点でいうと、高齢化が進んでいるフィンランドにおいて、高齢者の運動が重要なポイントであり研究のひとつの柱になっている。さらに関連して平均寿命の延長（公衆衛生の向上）のみならず、健康寿命の延長の意識が強く感じられた。

【参考文献】

- 涌田龍治・三浦望慶・斎藤浩二・朴澤泰治・小室良太郎〔2006〕「フィンランド共和国カヤーニ応用科学大学との国際交流に伴う視察報告」『仙台大学紀要』第38巻第1号、pp.81-94、2006年
- 小出高義・越川茂樹〔2015〕「冬季フィンランドにおける市民とスポーツのかかわり」『北海道教育大学紀要教育科学編』第65号（2）、249-259頁、2015年2月
- 小出高義・越川茂樹〔2015〕「フィンランドにおけるへき地・小規模校の現状に関する事例研究」へき地教育研究（70）、79-85頁、2015年

【付記】

本稿は、平成30年度名寄市スポーツ合宿誘致推進協議会における「ヴォカティオリピックトレーニングセンター等調査研究事業」の成果の一部である。また本視察のために勤仕いただいた高橋直博氏（(有)ジェイエフデザイン）と森元美津子氏（(有)kissho）の両名には心よりお礼を申し上げたい。

